

研究ノート

チャラカ・サンヒターのプラナー説
—ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派のプラナー説の
全体像把握に向けての一考察—

長 友 泰 潤

(哲学研究室)

(2010年1月27日受理)

The Theory of Prāṇa in Carakaśaṃhitā

Taijun Nagatomo

Laboratory of Philosophy, Minamikyushu University,

Takanabe, Miyazaki 884-0003, Japan

(Accepted : January 27, 2010)

南九州大学研究報告 第40B号 別刷

平成22年4月

Reprinted from

BULLETIN OF MINAMIKYUSHU UNIVERSITY

40B

April, 2010

研究ノート

チャラカ・サンヒターのプラーナ説
 —ニヤーヤ・ヴァイシェーシカ学派のプラーナ説の
 全体像把握に向けての一考察—

長 友 泰 潤

(哲学研究室)

(2010年1月27日受理)

The Theory of Prāṇa in Carakasamhitā

Taijun Nagatomo

Laboratory of Philosophy, Minamikyushu University,

Takanabe, Miyazaki 884-0003, Japan

(Accepted : January 27, 2010)

Summary

In the view of Carakasamhitā (CS), Vāta (or Vāyu) consists of prāṇa, udāna, samāna, apāna and vyāna. Vata brings the object perceived by the five sense organs and manas to the atman. So internal organs like the manas and buddhi, share the function vāyu in common. The internal organs are connected to the five sense organs by this function. And the prana plays an important role in the maintenance of the body and all the sense organs. It is conducive to good health, improvement of strength and complexion, luster, growth, and complexion in addition to the attainment of knowledge and longevity. Outside the body, it brings about cohesiveness among, and movement by the sun, moon, stars and planet, Vāyu sustains the earth also.

The Prasastapādabhāṣya (PD), present a view that recognizes two forms of Vāyu; in the form of atoms and in the form of products. The product form is again divided into four: the body, the sense-organ, the object and the prana. The sense-organ relating to Vāyu is called skin (tvak) which pervades all over the body. It is instrument of touch in all living beings. And prāṇa is the vāyu which exists within the body of beings and it is the cause of transport for the various fluids, secretions and other materials in the body. It is of five kinds as prāṇa, apāna, samāna, udāna and vyāna, owing to its various functions.

According to the above investigation, it can be maintained that there is some difference between the view of prāṇa in the PD and the view presented in the CS. In the CS, prāṇa brings about cohesiveness and movement among the sun, moon, stars and planets, while sustaining the earth also. However the PD, has no mention of the relationship between prana and the natural phenomenon like the sun and earth.

Key words: Carakasamhitā Prasastapādabhāṣya prāṇa.

序

インド古典医学論書の一つであるチャラカ・サンヒターには、風（プラーナ）についてのいくつかの特微的な言及が見られる¹⁾。本稿ではその内容を吟味しながら、ヴァイシェーシカ学派の論書プラシャスタ

パーダバーシュヤ (Prāsastapādabhāṣya以下PD)²⁾ の第二章に見られるプラーナ説との部分的比較考察を行い、ニヤーヤ学派のプラーナ説の全体像の把握と全体的な比較研究に向けての端緒的考察を行う。

1. プラシヤスタパーダバーシュヤのプラーナ説

まず、PDでは風について次のように述べられている。

「風性と結合するから風である。(風は) 可触性・数・分量・別異性・結合・分離・かなた・こなた・潜勢力を有する。その可触性は非熱・非冷であって、加熱による変化はない。(このことは、『ストトラ』の中に) 属性として規定しているから、成立する。」

vāyūtvābhisambandhādvāyuh / sparśasaṃkhyā-
parimāṇapṛthaktvasaṃyogavibhāga-
paratvāparatvasaṃskāravān/
sparśosyānuṣṇāsītate satyapākajaḥ/
guṇaviniveśāt siddhaḥ / ³⁾

ここでは、風の性質として、可触性・数・分量・別異性・結合・分離・かなた・こなた・潜勢力が挙げられ、その可触性は非熱・非冷であって、加熱による変化はないとされている。

また、PDは風について次のように述べている。

「『色形なきものにおいては、眼にみえぬ』と(『ストトラ』に) 語られているから、数等の七(属性が風にあることがわかる)。『草の運動』と(『ストトラ』に) 語られているから、潜勢力が(風にあることがわかる)。また、微細と結果との状態があるから、これは二種である。このうち、結果を特徴とする(風)は身体・感官・対象・生気の四種である。」

arūpiṣvacākṣuṣavacanāt sapta
saṃkhyādayaḥ / ṛṇakarmavacanāt
saṃskāraḥ / sa cāyaṃ dvididho
'ṇukāryabhāvāt / tatra kārya-
lakṣaṇāścaturvidhaḥ śarīram
indriyaṃ viṣayaḥ prāṇa iti / ⁴⁾

ここでは、いくつかのストトラの語句が引用され、風が潜勢力等の性質を持ち、微細と結果との状態があることが述べられている。また、結果を特徴とする風は身体、感官、対象、生氣(プラーナ)の四種であるとされる。

さらに、PDは風について次のように述べている。

「感官はすべての生き物に可触性を知覚させ、地等に圧伏されない風の諸部分によって作られ、全身体に遍在し、皮膚という感官である。一方、対象は、知覚されつつある触感の拠り所となっているもので、可触性・音声・保持・震動を証相とし、水平の動きを本性とし、雲等押し進め押しとどめる等の能力がある。」

indriyaṃ sarvaprāṇināṃ
sparśupalambhakaṃ
pṛthivyādyanabhibhūtair
vāyavayairābdhaṃ
sarvaśarīravāpi tvagindriyam /
viṣayastūpalabhyamānasparśā-
dhiṣṭānabhūtaḥ sparśāśabda-
dhṛtikhampalingastiryaggamana-
svabhāvo meghādipreraṇa-
dhāraṇādisamarthaḥ / ⁵⁾

ここで、感官とは皮膚であり、すべての生き物に可触性を知覚させ、全身体に遍在するとされる。一方、対象としての風は知覚されつつある触感の拠り所となっているもので、可触性・音声・保持・震動を証相とし、水平の動きを本性とし、雲等押し進め押しとどめる等の能力があるとされる。

また、PDは風について次のように述べている。

「こ（の風）は感官では知られないが、多様であることが衰弱によって推知される。さらに、衰弱とは同じ速さで反対の方向へ動く二つの風の遭遇である。これはまた、部分を有するものを持つ二風の上方への動きによって推知される。それはまた、草等の動きによって（推知される）。プラナーナは身体内であって、汁・糞尿・要素を押し進めること等/の原因で、唯一であっても、作用に区別があるので、アパーナ等の名称を得る。」

tasyāpratyakṣasyāpi nānātvaṃ
sammūrcchanenānumīyate /
sammūrcchanam punaḥ samānajavayor
vāyvorviruddhadikkriyayoḥ sannipātaḥ
sopi sāvayavinorvāyvorurdhvagamanena-
anumīyate tadapi tṛṇādīgamaneneti /
prāṇontaḥśārīre rasamaladhātūnām
preraṇādiheturekaḥ sankriyā-
bhedādapānādīsaññām labhate//⁶⁾

ここで、風の多様性が同じ早さで反対の方向へ動く二つの風の遭遇である衰弱によって推知され、これら風の多様性は草等の動きによっても推知されると言う。また、生氣は身体内であって、汁・糞尿・要素を押し進めること等の原因で、一つであっても、作用に区別があるので、呼気・吸気等の名称を得るとされる。

小 結

以上の検討から、プラシャスタパーダパーシュヤの説く風について次のようなことが知られた。まず、風の性質として、可触性・数・分量・別異性・結合・分離・かなた・こなた・潜勢力が挙げられ、その可触性は非熱・非冷であって、加熱による変化はないと言う。また、いくつかのストラの語句が引用され、風が性質を持つこと、潜勢力があること、微細と結果との状態があること、そして、結果を特徴とする風は身体、感官、対象、生氣（プラナーナ）の四種であると言う。この感官とは皮膚であり、すべての生き物に可触性を知覚させ、全身体に遍在するとされる。

一方、この感官の対象は知覚されつつある触感の拠り所となっているもので、可触性・音声・保持・震動を証相とし、水平の動きを本性とし、雲等押し進め押しとどめる等の能力があるとされる。次に、風の多様性が同じ早さで反対の方向へ動く二つの風の遭遇である衰弱によって推知され、草等の動きによっても推知されると言う。また、生氣は身体内であって、汁・糞尿・要素を押し進めること等の原因で、一つであっても、作用に区別があるので、アパーナ等の名称を得るとされる。

2. プラシャスタパーダパーシュヤのプラナーナ説とチャラカ・サンヒターの見解との比較検討

チャラカ・サンヒターでは、ヴァータという語が風を表現する語として用いられており、特に、身体内のヴァータは乾燥・軽さ・冷たさ・激しさ・清さ・荒さ・空洞性をもたらすものによって増大し、湿り・重さ・温・滑らかさ・軟・密集性をもたらすものによって減少する。つまり、ヴァータは身体内で、増加したり減少したりするものである。ヴァータ以外に、同じく風を意味するヴァーユという言葉も使われて、それが、プラナーナ、ウダーナ、サマーナ、ヴィヤーナ、アパーナの五種からなり、身体を保持するものとされている⁷⁾。

一方、PDでは、風を表す言葉として、ヴァーユとアパーナ（プラーナ等の五風の一つ）が使われている。この風の性質として、可触性・数・分量・別異性・結合・分離・かなた・こなた・潜勢力が挙げられ、その可触性は非熱・非冷であって、加熱による変化はないとするが、このような風の性質についての記述はチャラカ・サンヒターにはない。チャラカ・サンヒターでは、乾燥・軽さ等で風が増大し、湿り・重さ等で風が減少するというような、風に関わる外的要因が述べられているだけである。

また、チャラカ・サンヒターでは、正常な状態にある風がマナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶ。さらに、風は身体組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされる。この風が体内で激化した場合には、マナスを混乱させ、感官を障害し、また、身体的、精神的病いの原因となるとされている⁹⁾。

PDでは、結果を特徴とする風は身体、感官、対象、プラーナの四種であり、この感官とは皮膚であり、すべての生き物に可触性を知覚させ、全身に遍在するとされる。PDにおいても、プラーナという語が用いられているが、全身に遍在するのは、プラーナそのものではなく、皮膚という感官であり、マナスとの関連についての記述は見られない。

次に、チャラカ・サンヒターでは、風が正常な状態の場合の自然界での働きについて、その時、風は大地を支えるものであり、太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化、植物の生長や季節等の自然現象は風の働きであるとされている。また、風が激昂した状態の場合の作用については、その時風は、大地を揺るがし、嵐を呼び、生物に疫病をもたらし、滅亡させるとされる⁹⁾。

PDでは、上記のチャラカ・サンヒターの如く、太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化に関わるものとしては、風を捉えてはいない。風は知覚されつつある触感の拠り所となっているもので、可触性・音声・保持・震動を証相とし、水平の動きを本性とし、雲等を押し進め押しとどめる等の能力があるとされ、また、草等の動きによっても推知されるとする。

チャラカ・サンヒターでは、医学的な観点からの、風についての言及がある。すなわち、医者は突然激化した風に対応しなければならない。また風を賞賛することは、体力の増進や寿命を延ばすのに役立つとされる。医者は、風を、特に病気等の原因となる激化した風について知り、緊急に対応すべきものであると考えられていたようである¹⁰⁾。

一方、PDでは、生氣は身体内であって、汁・糞尿・要素を押し進めること等の原因で、一つであっても、作用に区別があるので、アパーナ等の名称を得るとされる。ここで、PDにおいても、体内での風が、アパーナ等と呼ばれ、汁・糞尿・要素を押し進めることの原因とされて、身体状況と風とが何らかの関係を持つことを暗示させるが、チャラカサンヒターのように病気や健康の原因とまでは捉えていないようである。

結 論

上記のチャラカ・サンヒターの見解とプラシャスタパーダバーシュヤの説の比較検討によって、次のようなことが知られた。まず、チャラカ・サンヒターでは、風が正常な状態にある場合に、マナスを制御し、すべての感官を活動させ、すべての感覚対象を認識主体の方へ運ぶとされている。しかし、PDにおいては、マナスと風について、両者を関係づけるような記述は見られない。しかし、チャラカ・サンヒターでは、プラーナ等の五風が風であるとするが、PDにおいても、風が身体内ではアパーナ等と呼ばれるとあり、この点は一致している。

さらに、チャラカ・サンヒターでは、風は身体組織の様々な機能を有効に働かせ、病気から守り、身体を正常に保つ生命持続の原因とされる。一方、PDでは、プラーナは身体内では、汁・糞尿・要素を押し進めること等の原因であるとされるが、チャラカ・サンヒターの説のように病気と関連づける言及は見られない。しかし、体内の諸要素に風が働きかけ、それらを動かしている点では同じである。

また、チャラカ・サンヒターでは、太陽や月、星の運行を含め、宇宙の運動変化、植物の生長や季節等の自然現象は風の働きであるとされている。このよう宇宙論とも言える壮大な説は、PDには見られない。

ただし、風には雲等を押し進め押しとどめる等の能力があり、風の存在は草等の動きによっても推知されるとされており、自然現象との関係性は認められる。

このように、チャラカ・サンヒターの説とプラシャスタパーダバーシュヤの説には、基本的な部分での一致が見られる反面、総合的、応用的な部分では相違点も見られる。総じて、プラシャスタパーダバーシュヤの説では、風を四元素の一つとして捉え、その基本的な性質について記述していることが見て取れる。一方、チャラカ・サンヒターは医学書でもあり、風についての言及が、より自然科学的、または医学的な見地から応用的に語られている。両者の風についての表現の違いは、このことに起因しているとも考えられる。

摘 要

チャラカ・サンヒターとプラシャスタパーダバーシュヤの風についての見解には、基本的な部分での一致が見られるが、総合的、応用的な部分では相違点も見られる。これはプラシャスタパーダバーシュヤの説が、風を四元素の一つとして捉え、その基本的な性質についてのみ記述しているのに対し、チャラカ・サンヒターは医学書でもあり、風について、より自然科学的、医学的な見地から応用的に記述されていることに起因しているとも考えられる。

注 記

- 1) 長友泰潤「チャラカ・サンヒターのプラナー説—シャンカラ説との比較研究—」南九州大学研究報告 人文社会科学編38号 (B) pp.29-35 2008.4.
- 2) Praśastapādabhāṣya (以下PD) ed by Vindhyesvari Prasad Dvivedin., Sri Garib Dass Oriental Series-13., Delhi 1984 p44. ll. 1-4 本多恵『ヴァイシェーシカ哲学体系』平成2年 国書刊行会 p.77参照.
- 3) PD. p44. ll. 1-4 本多恵『ヴァイシェーシカ哲学体系』平成2年 国書刊行会 p.77参照.
- 4) PD. p44. ll. 4-7 本多上掲書 p.78参照.
- 5) PD. p44. ll. 8-12 本多上掲書 p.78参照.
- 6) PD. p44. ll. 12-18 本多上掲書 p.78参照.
- 7) Carakasamhitā (以下CS) ed by V. Bh. Sharma, Chowkhamba Sanskrit Studies, Varanasi 1988. VOL. XCIV. Vol. I., p.236., ll. 10-16; p.237., ll. 15-20 矢野道雄『インド医学概論』(科学の名著第Ⅱ期) 昭和63年 朝日出版 p.84-85参照.
- 8) CS., p.237., ll. 15-20; p.237., l.35~p.238., l.3 矢野上掲書 pp.85-86参照.
- 9) CS., p.238., ll. 11-15 矢野上掲書 p.86参照.
- 10) CS., p.240., ll. 120-23 矢野上掲書 p.86参照.